

「マカオユースキャンプ 2012」

「勇闘高峰青年成長一日本体験計画 2012」

平成 24 年 8 月 15 日(水)～8 月 24 日(金) 9 泊 10 日

— 共同開催 —

中華人民共和国澳門特別行政区教育暨青年局



I 事業の背景 (必要性)

平成 18 年度、中華人民共和国澳門特別行政区教育暨青年局（以下「マカオ青年局」という。）の視察を受けた際に、ニートや引きこもりの青年の自立を支援する目的で実施した「30 日間セルフチャレンジキャンプ」を紹介したところ、このプログラムに興味を示した。

その後、マカオ青年局が日本（当所）に來日し、本プログラムによるキャンプを実施する際の企画運営の要請が当交流の家にあった。

当所では、日本の青年教育プログラムを海外に発信普及する機会と捉え、平成 20 年度・22 年度にキャンプを実施し、今年度、第 3 回目を実施した（平成 21 年度はインフルエンザのため、23 年度は震災の影響のため中止）。

II 事業の概要

1. 趣 旨

テレビゲームやインターネットで遊ぶ時間が長く生活リズムが乱れていたり、自立心や主体性、協調性が低かったりするマカオの青年を対象に、寝食を共にした共同生活を送りながら、勤労・奉仕体験活動や農業体験、富士登山をはじめとする自然体験活動を通じて、規則正しい生活習慣の定着を図り、主体性・協調性・自律心を育む。

また、当所で開発した「ワークキャンププログラム」を海外に発信・普及する機会とする。

2. 参加対象・状況

14 歳から 18 歳までのマカオ青年 25 名（男性 13 名、女性 12 名）

マカオスタッフ：団長（国沙環青年センター）・ソーシャルワーカー（4 名）

通訳ボランティア（4 名）

日本人青年ボランティア（1 名）

※8 月 20 日(月)～22 日(水)：マカオ青年と交流活動・富士山登山に同行

御殿場市内中学生 14 名（男子 5 名、女子 9 名）

御殿場市社会教育課スタッフ（2 名、富士山登山時は 7 名）

3. 日程

日	曜	午前	午後	夜	
15	水	成田空港 17 時発 → 中央交流の家着 20:00			オリエンテーション
16	木	仲間づくりの活動	スポーツ活動(ソフトボール)	富士登山用具確認	
17	金	スポーツ活動(剣道)	野外炊事	ウォークラリー	グループ別市内研修計画
18	土	牧場体験	グループ別研修(市内)	奉仕活動ミーティング	
19	日	農業体験	勤労奉仕活動	グループ別都内研修計画	
20	月	伝統文化体験(茶道・書道)	中学生合流・スポーツ交流	富士登山準備	
21	火	富士登山(須走口) 5 合目出発 10:30 → 山小屋着 17:00			山小屋泊(本 7 合目)
22	水	山頂着 7:30 出発 9:00 → 5 合目(須走口)着 15:00			中学生とバーベキュー
23	木	グループ別研修(都内・新宿)			送別パーティー
24	金	中央発 9:30 → 羽田空港			

4. 内容(活動の様子)

(1) 「仲間との交流活動」

中央交流の家 職員

① 「仲間作りゲーム」・「目標作り」

ア. グループで協力して課題を解決するゲームを通じて、グループで意見を交換したり、ゲーム後に、うまくできたか、できなかったか、また、その理由を考えたりする時間を設けた。

イ. 「仲間と一緒に頑張る」、「仲間を大切にする」という気持ちを持つため、個人・グループの目標設定を行なう。そして、その目標を意識して生活するために大きな旗に一人ひとりが目標を書き、キャンプ中は常に旗が見えるようにした。



② 「スポーツ活動(ソフトボール・剣道)」

ア. 初めて体験するスポーツのため、スタッフはルールと危険な行為を教えた。スタッフは安全への配慮に心掛け、青年達から目を離さずに見守るようにした。青年達は覚えてたのスポーツを汗をかきながら行い、仲間と一緒に活動することの楽しさを感じた。

イ. 剣道では、礼儀・信義・名誉・犠牲などを重んじる武士道について話を聞き、日本の文化に触れた。また、実際に向かい合い、大きな声を出して竹刀を構え稽古した。



③ 「グループで野外炊事(カレーライス作り)」

ア. 食事までの目標時間や片付けの時間を設定することで、一人ひとりの役割分担を決めて工夫したり、自分の仕事だけでなくグループの仲間の仕事を手伝い、協力して行なうようになった。

イ. 青年は「いつも食べているカレーよりおいしかった」と話した。そこで、なぜ、そう感じたのかを考えさせるミーティングをしたところ、青年は「一人で上手にできないことも、助け合って作ったから」と答えた。協力することの大切さを実感したようだ。



④ 「御殿場市中学生とのスポーツ交流（ソフトボール）」

ア. 富士登山と一緒に挑戦する中学生 14 名と一緒に、2 チームに分かれてソフトボールをした。

イ. マカオの青年は緊張する中学生に「コンニチハ、オネガイシマス」などと覚えてたの日本語で積極的に声を掛け、一緒に楽しもうとした。そのおかげで徐々に慣れてきた中学生は、英語での会話を試みるなど明るい雰囲気での交流になった。

(2) 「酪農体験・農業体験」「勤労奉仕活動」

① 酪農体験：デーリランド（富士ミルクランド）

ア. 広大な牧草地の広がる牧場で、大切に育てられている牛のやわらかくてあたたかい乳に触れ、乳搾りや大量に山積みされた牧草をエサとして与える体験を通して、命の温かさ、尊さに感動していた。

イ. 牛の乳を利用したバター作りに挑戦し、自分で作ったバターを塗ったパンを食べながら、動物に感謝する気持ちを持った。



② 農業体験：田辺鶏園（忍野村）

ア. 農家の方から「生活のために一束も無駄にはできない、苗が育たなければ生きていけない」という話を聞き、青年達は真剣に大切な苗を一束ずつ植えた。

イ. 実際に土に触れた青年達は、「作業をしながら元気に育って欲しいと思うようになった」と話し、農家の方の大変さや思いを感じることができた。



③ 勤労奉仕活動：中央交流の家

ア. 所内の木々を伐採して出来た枝を片付けた。一人では運ぶことのできない山積みになった枝を、仲間と協力して運び終えた青年達は、達成感と感謝された喜びを笑顔で表した。活動後、中央交流の家から一人ひとりに感謝状を渡した。

イ. 活動終了時間を決めて、どうしたら早く全てを運べるのかを考えさせてから始めた。青年達は「二人でかけ声を掛けて運ぼう」「順番に並んで次々に枝を受け渡していこう」など意見を出し合い主体的に活動した。



(3) 「日本伝統文化体験（茶道・書道）」 中央交流の家職員、地域指導員

① 茶道では、足のしびれを我慢して、正座でお抹茶を点てる作法を学ぶとともに、講師の凛とした立ち振る舞いに日本の文化を体感していた。青年は、「ずっと正座をしたままの先生の姿に日本人はすごいと感動した」と話していた。

② 書道では、「花」という言葉を書いた。「字を書いているときは心が気持ちよかった」と話していた。



(4) 「グループ別自主研修－御殿場市内・東京都内(新宿)」

① グループ別に研修計画を立てるために、各グループに地図と観光地案内を配付した。計画を立てる前には交通手段による所要時間・電車の乗り継ぎや販売店での注意を伝え

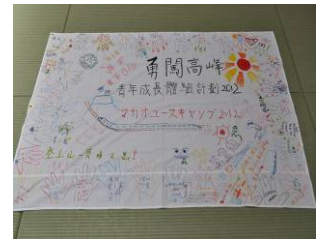
て、安全な研修計画を立てさせた。

- ② 御殿場から公共交通機関を利用し新宿（東京都）に行き、グループごとに都内探検を行なった。グループで行き先を決め、回転寿司や有名ラーメン店などで食事をとったり、ショッピングなどをして、日本の都市文化を楽しんだ。

(5) 「富士登山」 富士山ガイド：やまぼうしの会 若林 豊 氏

《登山の準備と片付け》

- ① 登山用具は、マカオに必要な用具と服装の写真を送り、マカオ国内で用具を準備してもらった。登山準備の時間では、用具を自分で素早く装着できるように練習した。
- ② 富士登山に対する知識が乏しいため、実際の富士登山の映像を見せながら、歩き方や高山病の予防、緊急時の行動等、登山の危険さ・困難さを伝えるとともに、登山への不安感や安易感を取り除いた。
- ③ 全員で作った旗を囲み、円陣を組んで「加油（ガヤオー）」と声を掛け、仲間と一緒に挑戦し頑張ろうという気持ちを持たせた。
- ④ 片付けでは、スタッフから「用具がなければいくら自分が頑張っても登山ができなかった」ことを伝え、登山で使用した用具は借りた物だけでなく自分の持ち物まで全てぞうきんで拭き、汚れを落とし、支えてくれた人や用具に感謝した。



《登山1日目》

- ① 須走口5合目(2,000m)10時30分出発(快晴)、ガイドから登山の注意事項を聞いた後で準備運動を入念に行なった。

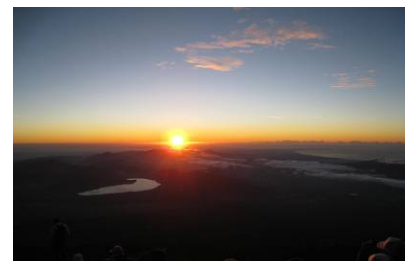
【ガイドからの注意事項】

- ・石を投げない、蹴らない
- ・登山道以外を歩かない
- ・自然植物を大切にする
- ・水をこまめに飲む
- ・苦しいときはゆっくり深呼吸をする
- ・歩幅は小さく

- ② 歩き始めてからは、約30分～40分に一度休憩を取り、その都度、各グループ1名の通訳ボランティアを通じて体調の確認、水分補給、糖分補給をするように伝え高山病や疲労の予防に努めた。
- ③ 富士登山のマナーとして、休憩して出発する時には必ず忘れ物やごみを落としていないかを確認させた。本7合目山小屋(3,200m)まで6時間、全員で体力の弱い者を励ましながらか予定通りの時間に到着した。
- ④ 一緒に登った日本の中学生は「苦しかったけれど、マカオのみんなが頑張っていたから頑張ろうと思った」と話し、自然にお互いを応援するようになった。

《登山2日目》

- ① 早朝4時の出発で8合目付近から遠く雲の上に昇るきれいなご来光を、初めて見た青年達は、感動し言葉もなくその太陽をじっと見つめていた。
- ② 8合目を過ぎた苦しい時に、弱音を吐いたり、自分勝手な行動で遅れて周りに迷惑をかけ始めた青年達に交流の家スタッフは、「山頂に行きたいのか、行きたくないのか」、「頑張れるのか、もうここで止めるのか」と考えさせた。青年達は自分自身の甘えに気付き、全員で頑張ることを決意し山頂を目指した。
- ③ 午前8時、2日間で10時間以上を歩き山頂(3,776m)に到達した青年達は、日本一の富士山の山頂に立った喜びを噛みしめた。



マカオのスタッフは「苦しい時こそ仲間と一緒に頑張ること・自分に負けないことが大切である」と話した。

- ④ 青年達は、山頂に立ったことで得た達成感と自信に満ちた表情で下山をはじめて5時間、須走口5合目のゴールに到着した。

青年は「高山病で本当に苦しくて、登山をあきらめかけた時にみんなが声を掛けてくれたり、手を繋いでくれたりしたから頑張ることができた。みんなに感謝している」と、仲間の大切さと感謝の気持ちを話した。



5. 評価

(1) 評価の方法

キャンプの効果を検証するために、国立青少年教育振興機構が開発した「IKR 評定用紙(簡易版)」の質問項目から、キャンプの目標に即した11項目を引用して質問紙を作成した(下表)。

各項目、「とてもあてはまる」6-「まったくあてはまらない」1の6件法で、日本に到着したキャンプの初日と日本を出発する最終日に実施した。

<質問項目>

- | | |
|---------------------|------------------|
| ①いやなことは、いやとはっきりいえる。 | ②自分から進んで何でもやる。 |
| ③誰にでも話しかけることができる。 | ④誰とでも仲よくできる。 |
| ⑤自分のことが大好きである。 | ⑥自分で問題点や課題を見つける。 |
| ⑦人の話をきちんと聞くことができる。 | ⑧自分勝手なわがままを言わない。 |
| ⑨花や風景など美しいものに感動できる。 | ⑩いやがらずに、よく働く。 |
| ⑪人の心の痛みがわかる。 | |

(2) 結果

各質問の総合得点は、キャンプ初日と最終日で13.1ポイント向上し、対応のあるt検定の結果、有意差が見られた。

なかでも、10ポイント以上向上した項目は、「人の心の痛みがわかる」、「自分勝手なわがままを言わない」、「いやがらずによく働く」であった。

また、自由記述の感想には、以下の記載があった。

- ・「早起きや3食の食事をしっかり取ることが、健康につながると実感した」
- ・「自分のことは自分で責任を持ってやるのが大切だとわかった」
- ・「奉仕活動の時に、頑張って作業したことに対してありがとうと感謝状をもらったことがとてもうれしかった」
- ・「富士登山では仲間が応援してくれたから頑張れた」
- ・「自分が苦しいときはみんなも苦しいから助け合わなければいけないと感じた」

Ⅲ 事業の企画と運営

1. 企画のポイント

- ① 過去2回実施したキャンプを参考に、マカオ黒沙環青年センター(以下「青年センター」という。)からプログラムについての要望を受け、中央交流の家が原案を作成し、青年センターと協議の上決定した。

- ② 共同生活による生活のリズムを定着させるため、定時に就寝・起床し、3食の食事をとることを期間中継続した。
- ③ 仲間と励まし合いながら富士登山という困難な活動に挑戦することで、達成感を得るとともに協調性を育み、自分に自信を持つことに繋がると考えた。
- ④ 富士登山への挑戦では、マカオ青年の身体能力・精神的なことを考慮し、本7合目山小屋での泊を伴う1泊2日での十分に余裕のある計画とした。
- ⑤ 農業体験や酪農体験は、観光目的ではない本物を体験させるために、実際に生活のために農地を耕し作物を育てる農家や乳牛を育て牧場を経営する方の協力を得た。
- ⑥ 日本の伝統的な武道や茶道・書道といった日本文化体験、また、東京都内での自主研修など、マカオ青年が日本の文化について理解を深める機会を多く設定した。

2. 運営のポイント

- ① プログラムの全体的な指導は中央交流の家職員が行ない、マカオ青年の生活指導や個人の相談はマカオスタッフが行なうこととした。
- ② 中央交流の家職員の指導が、正確にマカオスタッフや青年に伝わるように、通訳ボランティアとコミュニケーションを密にし、指導の意図を適切な言葉で通訳してもらうようにした。

3. 指導のポイント

- ① 個人の目標を達成するために、キャンプ全体の目標を一人ひとりが意識して行動できるような指導をした。
- ② マカオ青年にはルールやマナー、また、活動のやり方や安全についての指導など、わからないことは「教える」。そして、どのようにしたら良いのかは「考えさせる・気づかせる」ことを意識して使い分けるようにした。
- ③ 活動の後や1日の終わりには、個人の感想、活動を通じて気づいたり学んだことをグループで話し合う時間を設定し、グループの仲間の考えを共有することとともに、次の活動に活かしていけるようにした。

4. 成果と課題

(1) 成果

- ① 個人、グループに目標の設定をさせ、その目標を意識し共有する指導の方法をとることで仲間との絆を強く深めることができた。
- ② 富士山登山という身体的・精神的にも困難な活動を通して、達成感を味わい自分に自信を持つことや、仲間の励ましに支えられたことに感謝し、協調性を育むことができた。

(2) 課題

- ① キャンプの運営に際して、言葉の問題が大きく、マカオスタッフや青年とのコミュニケーションを取ることが難しいため、日本人の通訳ボランティアの配置が必要である。
- ② 日本人の青年にとっても国際的視野の醸成や異文化理解に繋がるため、キャンプを通して日本の青年が関わることができるような事業にすることが課題である。

担当：望月省吾，中村匡寛